CAMPUS TOPICS
キャンパス✤トピックス

閉会後、エントランスにて

JH 中学校

約2000人が来校 中学校入試説明会

今年度の中学校入試説明会は11月29日(土)に開催しました。年々参加者が増加し、昨年からは会場を記念会堂から中央棟大アリーナに移しましたが、それでも満席となったため、午前を小学校6年生、午後を5年生以下対象とし、2回に分けて実施しました。

午前は入試を間近に控えた6年生対象ということもあり、朝早くから多くの受験生や父母の方が列を作り、急遽、椅子を追加するほどの人数となりました。最終的な参加者の総数は、午前午後合わせて約2000人でした。

全体会は最初、吹奏楽部数名で重奏を演奏。校長あいさつのあと、「夢にむかって」を上映し、副校長から21年度の入試出願についての説明と20年度入試の解説を行いました。年明けの入試を控えて親子とも真剣なまなざしで聞き入る姿が多く見られました。全体会終了後、希望者を対象に行った入試相談も長蛇の列で、改めて中学受験に対する熱気と期待が感じられました。

午後は5年生以下対象のためか、参加者に若干、余裕が感じられる様子でした。全体会は午前とほぼ同様でしたが、3年生の生徒のスピーチ「ひとつになった学園祭」も加わり、中高キャンパスやクラブ見学と合わせ、日頃の学校生活の一端を分かっていただけたのではないかと思います。

キャンパスツアー

U 大学

第3回秋のオープンキャンパスに1017人が来場

10月25日(土)、第3回秋のオープンキャンパスを開催しました。愛知淑徳大学を希望する受験生を対象に、本学をより理解してもらうために年3回開催しています。今回は、長久手キャンパスと星が丘キャンパスへ、合わせて1017人の来場者がありました(保護者数は含めず)。

当日は晴天にも恵まれ、東海4県はもちろん全国各地から来場いただきました。また、高校1、2年生や保護者の方の姿も多く見受けられ、本学への関心の高さが伺えました。

教員と相談できる本年度最後の機会ということもあり、学科・専攻相談コーナーや入試相談コーナーには、入試を目前に控えた受験生による長い列ができました。また、全体説明会では各学科・専攻の内容や入試ポイントをつかもうと、朝早くから多くの受験生がつめかけ、真剣に聞き入っていました。

さらに、今回初の試みとして、第2回夏のオープンキャンパスで実施した「公募制推薦入試基礎学力試験対策講座(国語・英語)」の模様を両キャンパスでビデオ上映しました。間近に迫った公募制推薦入試(基礎学力重視型)で合格を狙う受験生にとっては、とても有意義な機会となったようで、参加者からは満足したという声が多く寄せられました。

学科(専攻)相談コーナー

現代社会学部の北條さんが新潟アルビレックスBCへ入団

U 大学

現代社会学部3年の北條恭一朗さんが、プロ野球独立リーグ「ベースボール・チャレンジ・リーグ」に所属する「新潟アルビレックス・ベースボール・クラブ」に入団しました。

野球は小学2年生から高校まで。本学へはメディアに興味を持って入学しましたが、やはり野球への思い断ちがたく、1年秋にクラブチームの中堅「オール三重クラブ」へ入団。3番バッターとして活躍し、今シーズンは打率4割弱という好成績で首位打者に。「ミートには自信があります」。

昨年11月、BCリーグの合同トライアウトに参加し、約300人の中から20人の最終候補に選ばれ、新潟アルビレックスBCから指名を受けました。1次テストでは50mを5秒9で走り、俊足をアピール。「将来は走攻守揃った新庄剛志のような選手になりたいですね。どれだけ通用するか不安はありますが、周りの期待を裏切らないように頑張ります」。

明るくフレンドリーな北條さんは、所属する大嶽ゼミでも盛り上げ役。「試合には皆で駆けつけます!」とゼミ生を始め、皆から期待されています。

2月から新潟に移り、3月にチームに合流。4月からのシーズンが楽しみです。

U 大学

学生交流から始まった日タイ大学交流

10月29日(水)、タイ国立大学テープサトリー・ラチャパット大学の先生方13人が本学(長久手・星が丘)を訪問され、島田修三副学長、藤井正志国際交流センター長らがお迎えしました。

一行は、人文社会学部長、IT学部長、そして日本語学科長など要職に就かれている先生方で、本学の国際交流センターや情報教育センター、図書館などの優れた施設の見学と運営方法、そして、本学学生や教職員との人的交流の発展の可能性を話し合う目的で来学されました。

整備されたキャンパスや最新設備を備えた情報機器、システム、そして活発に行われている海外大学との交流活動やコミュニティ・コラボレーションセンターを通じた学生たちのボランティア活動には、特に関心を持たれていました。

星が丘キャンパスでは、ラチャパット大学と交流体験のある学生たちが先生方をお迎えし、笑顔の対面をしました。そして、文化創造学部の教員との懇談会では、各先生の研究分野の紹介に始まり、今後の学生交流のみならず教員同士の研究交流についても熱く語られました。

これを機に更なる交流の発展を願いたいと思います。

長久手キャンパスを見学

星が丘キャンパス正門前で、以前から交流のあった本学学生らと記念写真

藤森久美子さん（左）と川崎翠さん

高等学校

2年の藤森さんと川崎さんが英検1級に合格

2年生の藤森久美子さんと川崎翠さんが昨年、国内最大規模の英語検定試験「実用英語技能検定」（英検）の1級に合格しました。1級のレベルは大学上級程度と高く、2次試験では面接形式のスピーキングテストもあり、合格率はわずか10・2%という難しい試験です。

2人ともアメリカからの帰国子女で、藤森さんは約6年の滞在後、小学校5年生で帰国。すぐに準1級に合格し、本校へは中学から入学しました。

川崎さんは約14年過ごしたあと昨年3月に帰国し、本校へ編入。英検の準1級は帰国後すぐに合格しました。

2人は試験対策として問題集に取り組んだほか、2次試験の前には英語のラリー先生に面接の練習をしてもらい、試験に備えたそうです。

「英語は使わないとどんどん忘れてしまうので、英語の本を読んだりして維持するようにしています。将来は英語の使える仕事に就きたいと思っています」（藤森さん）。「試験ではスピーキングが難しかったですね。将来は日本の大学を卒業後、アメリカの大学院へ行きたいと思っています」（川崎さん）

マレーシア科学大学の学生らが本学を訪問

大学

11月27日（木）、本学の交流協定校であるマレーシア科学大学より留学生22人、先生方4人、合わせて26人のゲストをお迎えしました。

初めに本学について簡単な紹介を行った後、本学のボランティア学生と交流を深めました。ゲストからはマレーシアの気候、国民性、文化などを紹介していただきました。

その後、コミュニケーションホール特別室にてウェルカムパーティーを開催しました。本学の学生30人ほどが集まり、みんなで「福笑い」ゲームをして、留学生に日本文化の一端を知ってもらいました。また、マレーシア科学大学の学生にはマレーシアダンスを披露していただきました。衣装も美しくリズミカルな踊りで、最後は本学の学生も加わり、明るい調子の曲に合わせて全員でマレーシアダンスを踊り、大変楽しいパーティーとなりました。

大学

前川三喜男先生が藍綬褒章を受章

大学院ビジネス研究科の前川三喜男准教授が、昨年秋の叙勲で藍綬褒章を受章されました。

先生は昭和43年に公認会計士の資格を取得後、監査法人丸の内会計事務所に勤めたのち、昭和63年には監査法人トーマツの代表社員に就任。さらに平成16年6月からは、日本公認会計士協会副会長兼同協会東海会会長に就任し、現在も同協会相談役を勤めるなど、長年にわたり日本の公認会計士制度の発展に貢献されてきました。

先生は平成12年、本学のコミュニケーション学部講師に就任。平成17年からは大学院ビジネス研究科の准教授として「会計監査」を担当し、学生の育成にも尽力されています。

近年は、（財）2005年日本国際博覧会監事、愛知県行政評価制度委員会座長、愛知県経理適正化委員会など、多くの要職に就き、活躍されています。

今回の先生の受賞をお喜びすると共に、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

表現文化専攻と名古屋芸術大学有志によるアートプロジェクト「snap」開催

大学

交流ラウンジで行われた人形劇

1号館1階では、映像作品を上映

12月1～5日までの5日間、表現文化専攻の学術講演会として、愛知淑徳大学と名古屋芸術大学の学生有志によるアートプロジェクト「snap」を星が丘キャンパスで開催しました。1号館を中心に、12の作品（映像作品、オブジェ、パフォーマンスなど）の展示・上演を行いました。

大学内に点在する作品によって、普段なにげなく過ごしている場所に小さな非日常を作り上げ、驚きとともに、学生たちの中にある創作意欲を刺激することを目標としました。

今回のような企画は、表現文化専攻初の試みであり、色々と戸惑いや不安の多い中、準備期間が過ぎました。当日に準備作業を持ち越してしまうなどのちょっとしたトラブルはあったものの、特に大きな事故やハプニングもなく、無事に「snap」を終了することができました。最終日に行った親睦会では出展者と一般学生の交流が持たれ、こうした他大学と合同で行う企画の継続を希望する声もあがりました。

今回のアートプロジェクトsnap」を踏み台として、今後もこのような機会を持続して作っていけたらと思います。

浅井敬一朗先生が日本経営学会賞を受賞

大学

ビジネス学部の浅井敬一朗准教授は、日本経営学会誌に投稿した論文「中国プラスチック金型メーカーにおける技術革新の導入とスキル」が高く評価され、昨年9月4日、同学会賞を受賞されました。

従来、技能集約的な金型製作スキルの海外移転は極めて困難とされていました。しかし、急成長を遂げている中国のプラスチック金型メーカーを対象とした調査分析の結果、低スキルで設計、加工可能な精度の金型を製作し、投資をできるだけ早く回収するという商業資本的色彩が強い華人系メーカーがこれまで大半を占めていた中国に、新たに産業資本的発想のメーカーが出現したことをこの論文の中で指摘しました。これらの企業は日本企業と同様の最先端設備の投資を行い、数名、場合によっては1名の高度なスキルを保有する日本人技術者によって金型を完成させています。研究テーマの専門性、分析方法の独創性、分析結果の新規性が受賞につながりました。

今回の先生の受賞をお喜びすると共に、今後のますますのご活躍をお祈りします。